

軽度思春期特発性側弯症の 症例報告

公益社団法人 長野県柔道整復師会

原接骨院 原 隆

【 目的 】

昨年の本学会でCobb角80.5度と診断された重度の症例を報告したが、今回は弯曲の方向に左右の差はあるものの同年齢で、Cobb角も14度と15度で同程度と整形外科で診断され、同時期に医師からの紹介で来院した軽度の二症例を経験したため報告する。

【 対 象 】

NK : 11歳 女子 初検、平成27年6月28日
胸腰椎右側弯Cobb角15度

SA : 11歳 女子 初検、平成27年7月5日
胸腰椎左側弯Cobb角14度

二症例ともに疼痛等の自覚症状はなし

【方法】

1. 体操療法：体幹筋の伸展とともに筋力強化と、左右のバランスの調整（毎日継続）
2. RHP I 療法：実用新案取得の側弯症矯正具を使用し彎曲を矯正（2、3週間に1回程度）
3. 立位背面での外見所見と、2回目のX P検査により医師の診断のもとCobb角を比較し、経過を観察することにした。

【体操療法について】

鍛練運動

入浴、夕食前に行う。

11 足あげ腹筋 50回



12 両手足運動 50回



13 背筋伸ばし運動 20回



14 背筋。10秒を10回



正しい正座



基本運動

特に、就寝前に行うとよい

6 膝を立て、左右に倒す。50~100回



7 足を伸ばして左右に振る 50回



8 足を伸ばして上げ下げする 50~100回



9 足を伸ばして開いたり閉じたりする。50~100回



10 自転車こぎ。前後合わせて 50~100回



1 腰伸ばし。ヒザ抱え運動を 50~100回



2 腰伸ばしを10分間



3 1をやる



4 正座の姿勢から、仰向けになる。5~7分間



5 再び1をやる



【RHP I 療法について】

側弯症矯正具



■側弯症矯正具の**使用前**
腰椎Cobb角約**40°**

■側弯症矯正具の**使用時**
腰椎Cobb角約**30°**

【結果 1】

NK



H27. 6/25
Cobb角15°

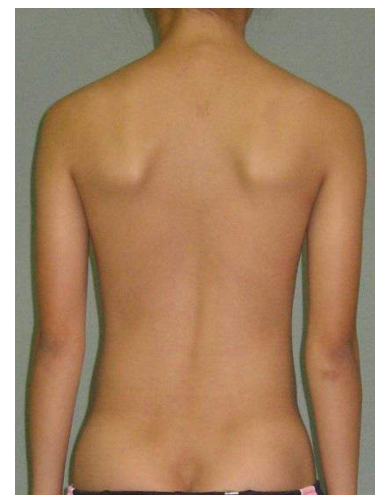


H27. 6/28

【再検時】



H27. 9/28
Cobb角14°



H27. 9/27
第4回治療後

SA



H27. 6/27
Cobb角14°



H27. 7/5



H27. 9/28
Cobb角17°



H27. 9/27
第5回治療後

【結果 2】

NK



H27. 6/25

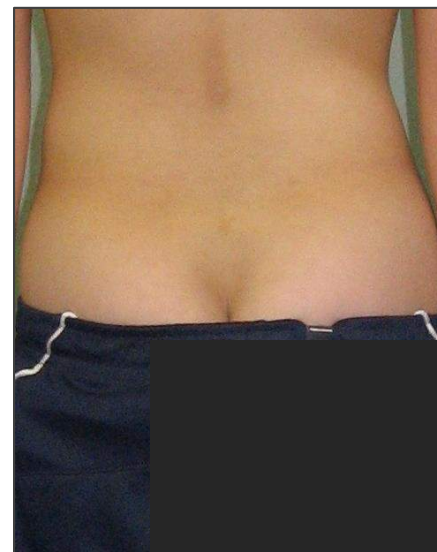


H27. 6/28

SA



H27. 6/27



H27. 7/5

【 考 察 1 】

1. 今回、彎曲の形状以外は、ほぼ同等の条件にもかかわらず結果に差が出た要因について精査の必要があると思われる。
2. 要因として結果2より、左右腸骨の発育差の関連性を推察し、側弯症は脊柱だけでなく骨盤にも着目することで新たな発見や早期治療の可能性が期待できると考える。
3. 仮に腸骨の発育差がある場合、早期に装具を使用することで重症化の予防ができるのではないかと推測する。

【 考 察 2 】

4. 今後は医師に相談し、骨盤のみのレントゲン検査も新たに依頼し、低度数でも重症化の可能性が診断され、患者、保護者が納得すれば早期に装具の使用も検討していきたい。

5. 思春期は身長の変化が著しいことから、側弯症自体の早期発見が重要であるため、学校検診や家庭でも可能なチェックを行い少しでも疑いがある場合は、整形外科等での診断が重要と思われる。

【家庭でできる！側弯症チェック】

チェック方法

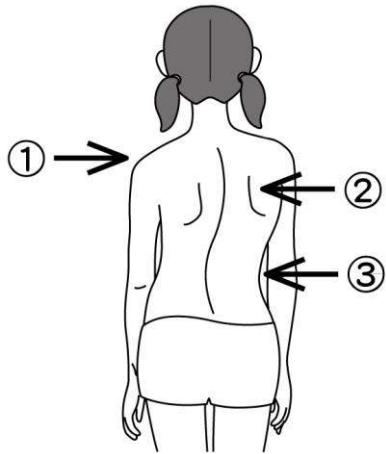
【立位】上半身裸になり立位（体の力を抜いた状態）で後ろから見る。① ② ③

【前屈】肩幅に足を開き、肩の力を抜いて両腕を垂らし膝を伸ばしたまま、ゆっくりお辞儀をさせ手のひらを合わせた状態で、前後から見る。④ ⑤ ※⑤は④より深いお辞儀をさせて見る。

チェックポイント

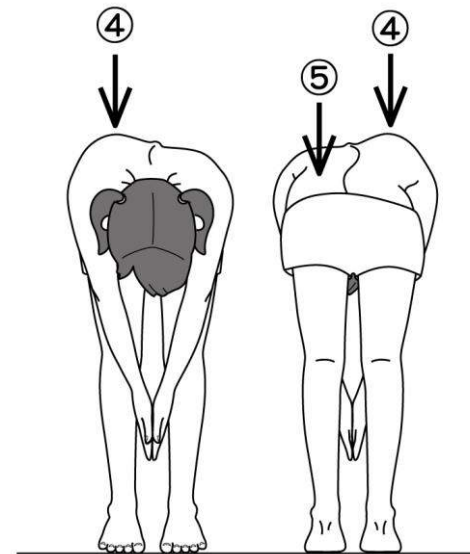
【立位】

- ①両肩の高さの違い あり・なし
- ②両肩甲骨の高さ、位置の違い あり・なし
- ③左右ウエストラインが非対称 あり・なし



【前屈】

- ④背中（肋骨）高さの左右の違い あり・なし
- ⑤背中（腰）高さの左右の違い あり・なし



その他のチェックとして家庭で可能ならば、胸やお腹、お尻の左右差や足の長さの違いも確認する。

少しでも左右に違いを見つけたら整形外科等でレントゲン検査を受け、診断して頂くことが重要。

【 結 語 】

1. 結果の判定は難しいが、彎曲の進行に腸骨の発育差が新たに関連している可能性が示唆された。
2. 今後も医接連携しながら新たな症例も検証し、エビデンスを追及することが重要である。
3. 早期発見するために、今後は保護者も含め学校関係者や専門医にご理解ご協力を頂き、予防の取り組みも努力する。



ご清聴ありがとうございました